

Title	豊中分室液化機将来計画委員会
Author(s)	
Citation	大阪大学低温センターだより. 34 P.19-P.19
Issue Date	1981-04
Text Version	publisher
URL	<a href="http://hdl.handle.net/11094/3863">http://hdl.handle.net/11094/3863</a>
DOI	
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 豊中分室液化機将来計画委員会

現在低温センター豊中分室で使用されているヘリウム液化機CTi1400は昭和49年に稼動開始以来すでに6年たち7年目に入ろうとしている。これは昭和34年理学部に極低温実験室が設置されて以来、途中「低温センター」として発展的組織変更を伴ってはいるものの豊中地区としては3台目の液化機である。そして優秀なオペレーター(技官)達の努力により、7年目とはいえ順調に作動し、センターとしての液体ヘリウムの供給業務はとどこおりなく行われている。しかしながら研究活動の拡大に伴う需要の増加と液化機の老朽化に対処するためにはやはり10年の単位で液化機の更新あるいは増設を考慮することが低温センターに課せられた大きな責任ある問題であると考えられる。このようなわけで昨年の拡大低温会議(豊中地区に於けるユーザーとセンターの連絡会議、毎年一回開かれる)において表記委員会の発足が認められ次期液化機の検討を始めることになった。委員は低温センター豊中分室の責任者、伊達教授、低温センター専任教官吉田助手、そしてユーザー側代表として、教養部大塚教授、基礎工学部松浦助教授にお願いし、それに理学部からは、過去長年低温センター豊中分室の供用官をつとめ、6年前に液化機の更新を経験し、また液化機に関する情報にかなり通じている本河助教授マネージャーを兼ねて加わることになった。

第一回目の委員会は55年の暮れもおしつまった12月24日、理学部物理教室談話室において、上記委員の外基礎工学部長谷田教授も参加されて行われた。第一回目のことでもあり、最初からどの液化機にするか選定するのが目的ではなく、まず豊中地区における液体ヘリウム需要の伸び、大型超伝導マグネットの普及の見通し、供給が増大したときのヘリウム回収の問題などが議論された。また現在市販されているいくつかの液化機の特徴や最近の技術的進歩、そして液化機メーカー業界の様子などが報告された。

今後このような会議を年1回程度開き将来予算要求の形にもっていきたいと考えている。

(文責 本河)